

第三百二回 青葉会

平成二十三年五月二十六日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階来客食堂 談話室

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子

朱牟田恵洲 豊田ゆたか 中野一灯 福島正明 南平和夫 山崎亜也 山内天牛

伊賀山そらお 土谷堂哉 中山芳博 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 中山芳博 橋口隆 早川允章 村田くに子

山崎青史 山本三恵

ゴシックは選者の天

《選者吟》

万里子 (清・正)

どくだみを朝夕百本抜くノルマ

全 (弘)

寿齡謝す土と緑に触さはりつつ

全 (隆)

頭上から子育て鴉に脅かされ

全

唱歌から父子の倍音梅雨の夜

全

通学路はあいさつロードとなり梅雨入りついで

全

《互選句》

六点

☆ 三陸の今年は聴けぬ田植歌

清 (万・堅・五・敏・允・和)

節電のほの暗き駅走り梅雨

恵洲 (紀・一・隆・和・く・青)

空豆や翡翠の色と塩加減

亜也 (堅・猛・正・和・く・三)

☆ 手摺みで斑はまだら 蝶捕る大手町

天牛 (万・弘・ゆ・一・芳・く)

五点

山若葉無人の里を犬歩く

そらお (猛・忠・一・隆・天)

(避難指定地域の光景)

一中節いちちゅうせう 聴く薄暑の午後や金田中

紀久男 (敏・ゆ・正・亜・天)

碧天に戸隠連山水芭蕉

猛 (孤・敏・ゆ・允・天)

水面切り川鶉の助走り梅雨

弘子 (堅・清・恭・恵・敏)

☆ 牡丹ぼたん のほの白き闇余震あり

ゆたか (万・五・龍・敏・二)

若ぶりに半袖ひやり初夏の朝

忠彦 (紀・猛・和・天)

竹の子へ鋏振り奥歯疼き出す

弘子 (恵・龍・芳・三)

☆ 数多あまた 子を喪ひし地の鯉幟

恵洲 (万・紀・恭・允)

(☆子を数多)

こつぼりの通り過ぎ行く青簾

堂哉 (忠・孤・五・允)

花は実にいわき訛りの乳母車

一灯 (紀・恵・亜・青)

(青：いつそのこと、さくらんぼとしては?)

夕立ちや人は土から出来てゐる

正明 (忠・孤・亜・天)

適当な人間隔水芭蕉

全 (堅・弘・恵・隆)

浄瑠璃を語る尼僧や今年竹

天牛 (紀・孤・ゆ・二)

薰風や網戸をすべて張り替へて

そらお (芳・天・三)

向島吟行

☆ 友唄ひ芸妓の踊る暮春かな

紀久男 (万・清・龍)

句集成る新樹光浴び祝ひ酒

全 (堅・忠・ゆ)

辻毎に寺の屋根見ゆ五月空

恭延 (孤・隆・三)

☆ 花桐を高みに探す散歩かな

五郎太 (万・孤・龍)

新橋を小走りに過ぐ薄暑かな

弘子 (恭・五・正)

☆ 良くはやる小児科医院熱帯魚

恵洲 (弘・正・亜)

☆ 三陸の海鞘ほや 懐かしむ夕餉かな

ゆたか (万・忠・青)

☆ 遠浅間花菜明りを介護バス

(☆↓浅間嶺や)

☆ 考える人ひた濡らす青しぐれ

海開き叶はぬ浜に雨が降る

震災を知らぬ顔して夏の雲

「太閤記十段目」

照明下げ凄みいや増す春芝居

☆ 春愁や古アルバムを繰り止まず

飯炊ける匂いの目覚め聞く老鶯

傘雨の忌ふと口ずさむ神田川

そこ踏むな草の葉陰の落し文

戯れに恋はするまじ桜んぼ

南風や夜行貨物の音運ぶ

人待ちてふと見上げればえごの花

斗酒辞さぬ意気や土佐なり塩鯉

風評は悪魔の声か遠花火

衣更ふ芳町老妓と昼の酒

放射能洩れ人災の夏嶮し

湖の面静まりて躑躅燃ゆ

☆ 薄暗に慣れて明るき若葉雨

たんぽぽ咲く瓦礫の中に想い出が

喜多方の白きアスパラ夏立ちぬ

玉苗の束飛び飛びに畦に並(なみ)

卯の花やモデルルームの耿耿(かうかう)と

サラダとせん風評被害の夏野菜

先見えぬ放射能禍や青時雨

みちのくの訛の電話著莪咲く夕

(下五↓著莪の夕)

野も寺も真白の憂き世西行忌

花花花園芸家の鼻高く

夏場所や醜(し)踏み地震鎮めよや

行く春や何を残して行き給ふ

常ならず柿の落果や地震の年

蛍追ふ平和の日々に宿の下駄

一灯 (万・恵・芳)

全 (万・恭・恵)

正明 (恭・芳・允)

清 (猛・隆)

紀久男 (敏・く)

堂哉 (万・猛)

ゆたか (龍・三)

一灯 (清・允)

全 (清・ゆ)

正明 (五・弘)

和夫 (一・亜)

亜也 (弘・龍)

全 (忠・く)

盛雄 (清・和)

紀久男 (亜)

恭延 (紀)

全 (く)

忠彦 (万)

全 (青)

五郎太 (青)

弘子 (芳)

全 (恭)

恵洲 (青)

ゆたか (く)

全 (正)

芳博 (三)

和夫 (猛)

規雄 (紀)

全 (五)

天牛 (堅)

盛雄 (紀)

● 次回青葉会

六月二十三日(木) 午後六時〜九時

▲ 当季雑詠各自五句 投句二句

七月二十八日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階談話室

丸紅

以上文責

紀久男

一、今回は300回記念「青葉會合同句集」（題字は50回記念の第一集以来、川合絹漱先生）が厚徳社（社内報「まるべに」印刷以来の永いおつきあい）から出来立てを句会場へ届けて貰った為、宛へさながら出版記念会の趣（おもむき）ありました。

随分久方ぶりの和夫さんが奥様・娘さんに付添われて来社され、15名出席。投句5名。残業で欠席の三恵さん（旭市の御実家のちば醤油が被災）、隆さんが句集引取りにお顔だけ出されました。全員揃ってから、先づ和夫さんから暫くぶりに出席された挨拶。次いで恭延さんより句集上梓を祝う乾杯の挨拶。

龍平さんから300回記念の祝として寄贈された朱塗の角樽「蔵の花」（山形の東洋酒造）や、隆さんの「魯山人」特別純米原酒（伏見）を呑み、先生の握り飯（伽羅薩入りと蚕豆入りの大と小）、弘子さんの和菓子「神田かの字」（亀澤堂）、和夫さんのゴディヴァをつまみ乍ら開始。いつもの弘子さんの進行役で御覧のように天牛さん、恵洲さんら9名の方々が高得点で並びました。飛び抜けた句が無かつた代り好句が多数揃いました。

二、記念句集を紙上選者を含む関係者へ順次郵送しておりますが、概ね好評です。但しミスプリントが二ヶ所ございます。小生の校正ミスで誠に申し訳なく謹んでお詫び申し上げます。左記二点です。お手数で恐縮ですがお手許の句集を訂正して頂ければ有難く存じます。

- 1、恵洲さんの作品（26頁）：見に入むや↓身に入むや
- 2、昇さんの作品（59頁）：酒止めると↓酒を止めると

ほかにも小生の見落しがあると思われまますので、各位には遠慮なく御指摘御通知下さるようお願い致します。

三、今回の紙上選者からのコメントの中から、お二人のものを紹介します。

1、仙台近郊出身の青史さんは「・・・今回の選は全て震災（関連）の句になりました。」

2、大震災で亡くなられた友人の弔問に仙台に行つて来られた芳博さんは「何故、何故、何故？の連続でした。災害復興への行政の方向が定まらず、聞いても答えは『未だ！』。」

（尚、芳博さんからの投句はメールの行違いで別の作品を出句しております）  
四、お茶屋遊びを経験されたことの無い会員が多かつた所為（せい）か、向島料亭での写真を回覧しつつ話題となりました。亜也さんが無地の白扇に芸者衆の名刺（小さい千社札）を貼つたものを披露され、冷かされておりました。好評だつたようで、又、再来年あたり企画することになりそうです。

### 五、関係者近詠

留守番はひとりが良くて桜餅	眞希子	アネモネや画家マネモネは印象派	奥西邦夫
ペン書きの卒業作文大人びて	全	〔NHK俳句〕6月号 有馬朗人選	
初難曾祖母二人祖母一人	全	子等歎呼トーン記号の芝桜	芳博
簡潔に年金手続き花薺	全	原子禍や村の菜の花黄が静か	全
仙女なる佳き名のパンダ春と来る	弘子	小糠雨若葉静かに艶めけり	全
春禽のあつち見こつち見餌呑込む	紀久男	梅雨雲を風が穿ちて青妖し	全
裏の梅やつと綻ぶ余震かな	忠彦	あぐ	
春望や地震止まるを祈るのみ	和夫	小満や行き倦ねたる杣の道	全
底冷えやおむすび分け合ふ老夫婦	全	神田初夏「藪」で一献傾けむ	允章
原子炉を制御し得んや春寒し	恭延	東京に三鬼の夏の来るかな	全

『萬緑』6月号

平成二十三年六月七日

紀久男記